

今日のセンセイ

麓 洋介さん



ふもと・ようすけ 1972年愛知県生まれ。同県立芸術大で作曲を学ぶ。愛知教育大准教授。幼児教育講座で保育内容指導法「表現」などを担当。音と他の五感を結びつけた表現遊びや、遊びから自然に音楽が生まれる「音楽を生み出す遊び」を研究している。



小さい時は音楽を聴いたり、歌ったりするのが好きだったのに、音楽の授業になると嫌いになってしまっ子がいるようです。音楽を好きになるには、どうしたらいいのでしょうか？ 「音楽を生み出す遊び」を研究している愛知教育大の麓洋介准教授に聞きました。（垣見窓佳）

音楽 好きになるには？



「基本的には、最初から音楽が嫌いという子は少ないと思う」と麓さん。「乳幼児にとっては、音は刺激の一つ。面白いから音に反応したり、ガラガラを振って音を出したりする」といいます。嫌になる理由は「音楽が嫌いというよりも、授業で自由に表現することを制限されたり、音楽知識を評価されたりするのが嫌というがあるんじゃないか」と推測します。

小学校の通知表に記載された音楽の評価項目

長所褒め 楽しんで歌おう

でも、音楽の授業では楽譜に書いてある通りに歌ったり、演奏したりすることを求められ、評価されます。音程が取れないなどの「音痴」はどうしたらいいのでしょうか？ 麓さんは「音痴は直りません」と断言します。

「音が高いのか、低いのかさえ判断できれば、練習でその度合いを直していけばいい。歌の場合、のども筋肉なので、運動と同じで何度も歌うことで、のどの使い方が分かって上手になっていく」。

ただ、そこまでサポートしてくれる学校は少ないかも。「学校で習う歌に限らず、人気のポップスやアニメソングなどでいい。好きな歌を何度も歌っているうちに、だんだん歌えるようになる。楽しみながら繰り返し歌うことが大切」なのだそう。

そして「学校でもし音楽の成績が悪くても、それで落ち込む必要はない」とも。「学校の成績と自己肯定感は別問題。切り離して、自分の『好き』を大切に」と麓さん。

は、自己肯定感を高めるために親ができることはあるのでしょうか。麓さんは「家でその子の良いところを見つけて、とにかく褒めてあげてほしい」といいます。

褒め方のコツは具体性。「声がいいよ」「○○の部分がかかったよ」と、手放しで褒めてあげるのが大切なんだそう。幼児教育では表現することを嫌にならないように、絶対に否定をしません。

麓さんがある小学校に合唱の指導に行ったとき、反抗期なのか、なかなか歌ってくれない男子児童がいたそうです。練習では何も言わずにいましたが、ある時、その児童に「良い声しているね。歌わないのはもったいない」と声をかけたところ、よく歌ってくれるようになりました。

「間違いを見つけて叱るのは簡単。でも、その子の持っている良いところを見つけて褒めるのが大切」といいます。

麓さんは「音楽は喜びや悲しみなど、自己表現をする場。歌って気持ちよさを感じてほしい」と願います。